ISSN 0917－4729

北方民族博物館だより

No.124

DR3.3.6　ビーバー毛皮　アラスカ／クリアー
80.0×53.0cm　伊藤精一氏製作（2001年頃）、宇土康宣氏寄贈（2021年）

アラスカのクリアー在住の罠猟師、伊藤精一氏が捕らえたビーバーの毛皮である。伊藤氏は1940年東京都府中市生まれ。1973年にアラスカに移住し、70年代末からクリアーで、アサバスカン・インディアンの血をひくトム氏から狩猟を学び、罠猟師として活躍した。ビーバー毛皮は表面の長毛を一本ずつ抜いて、手触りの良い下地の柔毛だけを残すことも多いが、本資料では長毛の処理は行われていない。ビーバー罠は冬季、結氷した河川に穴をあけて水中に仕掛ける。本資料は寄贈者が2001年頃に伊藤氏から直接もらいうけたもので、2021年に当館に寄贈された。

目次　Contents

1　表紙　ビーバー毛皮
2　ロビー展「道東の擦文文化」
3　講座「土器からみた擦文文化の地域間交流と道東部の遺跡群」
　／ロビー展「オホーツクシリーズ⑮　北の状景から」
4　企画展「ウイルタのモノとコトバ：サハリン先住民のコスモロジー（言語が切りとる世界）」
5　講座「ニヴフ語とその話し手たち」
　／新収蔵資料「2021年度新収蔵資料」
6　INFORMATION

北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

ロビー展

道東の擦文文化

2022.1.4-1.23

北海道域では、紀元後7世紀ごろから12世紀ごろにかけて、擦文（さつもん）文化がみられました。とくに北海道東部には、擦文文化期の終わり頃の遺跡が多くみられます。

本展では、当館が網走市と湧別町の遺跡で発掘調査をおこなった際に出土した擦文文化の遺物のなかから、土器に焦点を当てて展示しました。

擦文文化という名称は、「擦文土器」と呼ばれる土器が使われていたことによります。擦文文化期の人びとは、平面が方形の竪穴（たてあな）住居にくらし、ヒエやアワなどの雑穀栽培と、サケ・マスの河川漁労を主な生業としていました。

擦文土器の作り方は、本州の古代土器「土師器（はじき）」に似ています。また、住居には本州から導入されたカマドが付けられていました。当時使用されていた鉄器の素材も、本州から持ちこまれたものです。擦文文化は、それ以前にみられた続縄文文化が本州古代文化の影響を受けることによって形成されました。

今回展示した擦文土器は、網走市の美岬（みさき）4遺跡と能取（のとろ）岬西岸遺跡、また湧別町の川西オホーツク遺跡から出土したものです。いずれも、擦文文化の終わり頃、紀元後12世紀前後の年代が考えられます。

擦文土器には、煮炊きに使われた甕（かめ）が多くみられますが、そのほかに供献用と考えられる高坏（たかつき）や食事に使われた坏（つき）などの器種もみられました。施文用の道具によって幾何学的な文様がえがかれ、甕の胴部表面には「擦文」の名の由来となった、木製のハケで擦（す）ったあとが残っています。

本ロビー展は、511名の観覧者にご覧いただきました。

また関連事業として、会期中の1月16日に展示担当の種石による解説会をおこないました。

会場の様子

解説会で話した内容から、私も発掘調査を担当した能取岬西岸遺跡の擦文土器について、次に少し紹介したいと思います。

オホーツク文化遺跡として知られている能取岬西岸遺跡は、当館によって継続的に発掘調査されてきました。この遺跡の年代は、オホーツク文化期だけでなく、縄文時代や続縄文時代、擦文文化期も含まれていることがわかっています。

能取岬西岸遺跡の発掘をはじめると、はじめに表土と呼ばれる比較的新しい時期に堆積した遺跡表面の土を掘ることになります。擦文土器は、この表土とその下の遺物包含層と呼ばれるオホーツク文化期ほかの遺物を含んだ土層の間から出土する傾向があります。

能取岬西岸遺跡の擦文土器

この出土状況から、オホーツク文化期までの遺物包含層の堆積が終わった段階で、擦文文化人たちが能取岬西岸遺跡を利用しはじめたことがわかります。オホーツク文化人たちのこの遺跡の利用は9世紀頃まででですから、年代的にも合っています。

しかし問題もあります。この遺跡からはまだ、擦文文化期の住居跡などの遺構が見つかっていません。通常、擦文土器は擦文文化期の住居跡から見つかることが多いのですが、能取岬西岸遺跡の擦文土器は遺構から出土しないという特殊な状況をみせるのです。

オホーツク文化期の能取岬西岸遺跡の性格について、これまで当館友の会季刊誌「アークティック・サークル」114号14～17頁（2020年3月発行）の「断崖上の遺跡」で、生業キャンプ地だったのではないかと考えを示したことがあります。この遺跡からはまだ擦文文化期の狩猟具や漁撈具などは出土していません。今後も擦文文化期の遺跡の性格について検討しなければなりませんが、オホーツク文化期と同じように、美岬4遺跡をはじめとする能取半島東岸の擦文文化集落の生業キャンプ地だった可能性はあると推測されます。

（学芸グループ　種石　悠）

講座

土器からみた擦文文化の地域間交流と道東部の遺跡群

2022.1.23

講師：榊田朋広氏（札幌市文化財調査員）

ロビー展「道東の擦文文化」の関連講座を開催しました。新型コロナウイルス感染症拡大傾向が強まったため、リモートでの開催となりました。

会場の様子

講師の榊田さんは、著書『擦文土器の研究』（北海道出版企画センター2016年）を著した新進気鋭の研究者です。講座では、綿密な擦文土器の研究成果に基づいて、「大規模集落遺跡」や「地域間交流」などをキーワードに擦文文化について解説いただきました。まず擦文文化やトビニタイ文化のおおまかな説明の後、擦文土器の文様の特徴に着目した、地域間交流の説明に移りました。

ロビー展で展示された、網走市美岬4遺跡の擦文土器に類似した文様は、近隣の集落遺跡からではなく、100km以上も離れた美深町や枝幸町から見つかります。また、網走市の隣の北見市常呂には常呂川河口遺跡という擦文文化期の大規模集落遺跡があるのですが、ここから出土する擦文土器の文様に、ノコギリの刃のようなギザギザを重ねる文様があります。この文様の類例は網走市や斜里町の近隣地域だけでなく、礼文島や小平町などの遠隔地の遺跡からも見つかります。常呂川河口遺跡の擦文土器には、ほかに縦の線を並べた文様もみられます。この文様の類例は、北見市や斜里町の近隣地域だけでなく、釧路市や枝幸町、さらには札幌市の遺跡から見つかります。

榊田さんはこのような長距離間における擦文土器の文様の類似現象を、これら地域間の間にネットワークが存在していた証拠ととらえます。そして、その背後に地域間の婚姻関係があった可能性、あるいは物資や情報の流通網があった可能性などを想定します。札幌市K39遺跡から丸木舟の舳先が出土していますが、長距離間のネットワークを支えたのはこのような丸木舟だったのかもしれません。土器以外に、擦文文化期の北海道で広域にわたって共有されるものとして、須恵器（すえき）・銛頭（もりがしら）・オオムギがあります。

擦文文化期を通じて、北海道の各地に大規模集落群が展開してゆきます。地域や季節によって資源に偏りが生じたとき、地域間の交流によって調整がおこなわれた可能性があると考えられます。

（学芸グループ　種石　悠）

ロビー展

オホーツクシリーズ⑮ 北の状景から

2022.1.4－1.23

オホーツク地域の文化活動を紹介・発信する展示イベント「オホーツクシリーズ」の15回目として、写真展「北の状景から」を開催しました。このロビー展では、オホーツク地域の風景、動植物などを撮影したアマチュア・カメラマンの作品を展示しています。今回は坂森ナミさん、三浦奈津美さん、橋本郁弥さん、橋本敏一さん、伊藤博己さんの5名に、各10点ずつの作品を出展していただきました。

橋本郁弥さんの作品は、春の郊外、夏のひまわり畑、紅葉の山中、真冬の街など、四季それぞれの風景のなか、時に大きく、時に豆粒ほど小さく、どこかに必ず電車を映り込ませているのが印象的でした。

坂森さんの作品は、色彩の鮮やさやが特徴です。朝霧の白、ルピナスの紫、夕日のオレンジ、雨雲の黒、桜のピンクなど、身近な風景のなかに現れる、どきっとするような色を切り取っていました。

三浦さんの作品は、星空の写真で統一されていました。天の川を映す暗い水面、星空を背景に黒くそびえる建物、星たちの軌道を光の線として記録した作品など、夜の空の賑やかさに驚かされました。

橋本敏一さんと伊藤さんは、動物写真を中心に出品されました。被写体はモモンガ、シマリス、キツネ、オオワシ、タンチョウなど、オホーツク地域では比較的よく見かける動物たちです。橋本さんは、動物の姿を大きく写し、それぞれの表情や躍動感を生き生きと捉えています。一方で、伊藤さんは少し引いて、風景のなかで自然に振る舞う動物の姿を捉えています。

ロビー展には観光客や近隣の方々が訪れ、バラエティーに富んだオホーツクの風景を楽しんでいる様子でした。

（学芸グループ　中田　篤）

三浦奈津美さんの作品

企画展

ウイルタのモノとコトバ：サハリン先住民のコスモロジー（言語が切りとる世界）

2022.2.5-3.27

本企画展では、サハリン島の先住少数民族ウイルタの民族資料（モノ）とウイルタ語（コトバ）との結びつきを中心に、ウイルタの生活や文化を紹介しました。

ウイルタの民族資料

ウイルタは、統計史上1,000人を超えたことがない、世界的にみても人口の少ない民族の一つです。現在の人口は約300人とみられます。

20世紀の初め頃まで、ウイルタはサハリン島の中東部から北東部で、トナカイを飼い、季節移動をしながら暮らしていました。移動を妨げる明確な境界はありませんでした。しかし1905年、北緯50度上に国境が置かれると、ウイルタも南北に分断され、北のグループはロシア（旧ソ連）の支配を、南のグループは日本の支配を受けました。南のグループでは、第二次世界大戦ののち北海道に移り住んだ人もいました。

網走は、戦後に南のグループの出身者が暮らした土地の一つです。当館が所蔵するウイルタの民族資料は、網走市が収集した資料、市内にあった北方少数民族資料館ジャッカ・ドフニ（2012年閉館）が収集した資料、などで構成されます。

ウイルタ語の記録

ウイルタ語は、系統的にツングース諸語の一つとされます。方言は、北のグループが話す「北部方言」と南のグループが話す「南部方言」に分けられます。

戦後網走に住んだウイルタ（南部方言の話し手）のなかには、自らウイルタ語を書き記した人たちがいます。本企画展では、ウイルタ語の貴重な記録の一部として、ウイルタ自身によるノートや書簡を紹介しました。そのほか、約50年にわたってウイルタ語を研究した言語学者・池上二良のノートや単語カードなども展示しました。

会場の様子

本企画展におけるウイルタ語の紹介

本企画展では、民族資料すべてにウイルタ語の名称をつけて展示しました。また、一部のウイルタ語名称については、スマートフォンでネイティヴの発音を聴いていただけるようにしました（写真参照）。

そのほか、ウイルタ語のなぞなぞ・歌謡･おとぎ話の映像や、ウイルタ語による世界の切りとり方（事物の分類）に関するトピックスを紹介しました。

ラベルのQRコードをスマートフォンで読み取ると、ウイルタ語の発音を聴くことができる

例えば、ウイルタ語の語彙（い）はトナカイが野生か家畜かを明確に分け、さらに家畜トナカイを年齢・性別ごとに分けます。こうした細かな切りとり方は、ウイルタにとってトナカイがいかに重要な存在だったかを示唆しています。

ほかに、スカーフ（頭巾）の巻き方の名前、夜空の星の名前、借用語のいろいろ、なども紹介しました。

ウイルタとウイルタ語の現状

現在、サハリンに暮らすウイルタの日常会話はロシア語で行われ、ウイルタ語を話せる人はわずか10名足らずとなりました。

ウイルタの文化を残そうとする取り組みは、トナカイ飼育、民族芸能などさまざまな分野で行われています。ウイルタ語については、池上二良が監修した文字教本が2008年に刊行され、書記法が定まりました。それ以来、ウイルタ語で書かれた本が次々と刊行され、学校や市民サークルでウイルタ語を学ぶ活動も続いています。

企画展の最後には、2021年11月にユジノサハリンスクで開催されたシンポジウムで若者たちがウイルタ語でスピーチした映像を紹介しました。こうした発表の場も、ウイルタ語学習の動機付けとして重要な役割を果たしています。

おわりに

ウイルタ語にはウイルタの固有の世界観（コスモロジー）が反映されています。当館では、民族資料とともにウイルタ語の記録や情報も、大切に守っていきたいと思います。

（学芸グループ　山田祥子）

講座

ニヴフ語とその話し手たち

2022. 2.6

講師：白石英才氏（札幌学院大学・教授）

本講座は、令和3年度企画展の関連事業として、当館講堂でのパブリックビューイング形式とZoomウェビナーによるオンライン形式を併用して開催しました。講堂で13名、オンラインで49名の計62名がご参加くださいました。

白石英才氏は、世界でも数少ないニヴフ語（当館の展示等では従来「ニブフ語」と表記）の専門家です。話し手に面会してデータを収集する、いわゆる「フィールド言語学者」の一人でもあります。

白石氏による「ニヴフ語音声資料」シリーズ（全12号）の一部。ウェブ上でも公開されている。

ニヴフ（ニブフ）は、ロシア連邦サハリン州およびハバロフスク地方を主な居住地とする、人口4,652人（2010年ロシア国勢調査）の民族です。現在は一般のロシア人と同様に勤め人をして生計を立て、伝統的な生業だった漁労や植物採集は余暇の楽しみとなっています。

ニヴフ語は、他言語との系統が不明の「孤立言語」とされています。19世紀末頃はすべてのニヴフがニヴフ語を話したとされていますが、20世紀を通じて話者数は減少を続けました。ロシア語が優先され、世代間で民族語であるニヴフ語の伝達が途切れたためと考えられます。現在、ニヴフ語を話せる人は約50人と推定され、日常会話はロシア語でおこなわれます。

本講座では、白石氏が出会ったニヴフの人びとの現状を、写真や体験談を交えて具体的に紹介いただきました。そして、ニヴフ語の特徴も、実際に話し手から録音された音声を交えて、わかりやすく解説されました。

講堂からもオンラインからも多くの質問があり、参加者の関心の高さがうかがわれました。その一つ「今、目指していることは何ですか？」というご質問に対し、白石氏は「ニヴフ語の辞書を作ること」と回答されました。辞書の発行は、一筋縄で行く仕事ではありませんが、言語の調査研究において一つの到達点です。参加者アンケートの自由記述欄では、辞書を期待する声や講師を応援するメッセージが寄せられました。

（学芸グループ　山田祥子）

新収蔵資料

2021年度新収蔵資料

北方民族博物館では、毎年北方諸民族に関する資料の収集をおこなっています。収集する資料は、衣類や生活用具などの実物資料、伝統文化や現在の生活を記録した映像資料の二つに分けられます。また、それらとは別に、一般の方からご寄贈いただく資料もあります。2021年度は実物資料33点、映像資料4点を収集したほか、6件の寄贈を受け入れました。

今年度収集した実物資料の大半は、モンゴル国に暮らすカザフの民族資料です。伝統的な文様の刺繍（ししゅう）が施された壁掛け、フェルト製の敷物、男性用・女性用の上着やコート、帽子のほか、移動式住居の飾りとしてもちいられる織り紐（ひも）などを集めることができました。カザフ以外の民族資料としては、モンゴルの上着やベスト、モンゴル国の少数民族ドゥハの毛皮製小物入れ袋、そして2021年に新しく作っていただいた北海道アイヌの刀掛け帯などを収集しました。

カザフの壁掛け

映像資料は、研究や教育を目的として館内で上映したり、館外の講演会・研究会などに当館のスタッフが持参して上映するという形で利用されています。今年度収集した作品は、極北地域の先住民の現状に関するドキュメンタリー「アネルカ―生活の息吹き」（86分、2020年制作）、フィンランドの言語学者・外交官だったラムステッド（1873-1950）の足跡をたどり、現在の状況も含めて映像化した「東方の記憶」（86分、2018年制作）、ウデヘの現在と伝統文化を紹介した「ウデヘの国」（26分、2015年制作）、神話時代から現在までのチュクチの歴史をたどる「ファタ・モルガーナ」（59分、2004年制作）です。

寄贈資料は北アメリカ先住民の音楽を収録したLPレコード、北海道アイヌの木彫り熊、アラスカで捕獲されたキツネやビーバーといった野生動物の毛皮類、北方諸民族の言語や文化に関する書籍類、約60年前、30年前に網走で入手されたウイルタの木偶などです。

これらの資料は、北方民族博物館の財産として永く保存するとともに、今後特別展やロビー展、講座や講習会、上映会など、さまざまな機会を設けて活用していきたいと考えています。

（学芸グループ　中田　篤）

令和4年度 ロビー展
「「暖かい」だけじゃない！毛皮と北方民族の多彩な関係」

北方地域の諸民族は、衣類を始めとするさまざまな生活必需品の素材として動物の毛皮を活用してきました。また、美しい動物の毛皮は、他地域との交易品としても重要な役割を果たしてきました。このロビー展では、北方地域の代表的な動物とその毛皮を取り上げ、それらがどのように活用されてきたのか、実物資料とともに紹介します。

期間：2022年4月16日（土）～5月15日（日）
会場：北海道立北方民族博物館・特別展示室
主催：北海道立北方民族博物館、国立アイヌ民族博物館、ArCS II沿岸環境課題
主な展示資料：毛皮と毛皮を素材とした衣類などの民族資料（計50点程度）

関連事業
◇講座「毛皮と北方民族」
日時：4/16（土）10:00-12:00
講師：山口未花子氏（北海道大学）、田村将人氏（国立アイヌ民族博物館）、日下稜氏（北海道大学）

◇館長講座「環境に優しい北方文化：トナカイ毛皮のリサイクル」
日時：4/24（日）10:00-11:30
講師：呉人　恵（当館）

冬の染色したコート（呉人館長2004年3月撮影、ロシア・マガダン州）

北海道立北方民族博物館研究紀要　第31号目次
令和4年（2022年）3月刊

＜研究ノート＞
大島稔、野口泰弥
　日本人によるアリュート民族の研究(4)服部健「アリュート語資料」(2)

＜調査報告＞
中田篤
　サハ共和国におけるウマ・ウシ飼育の変遷：ソ連崩壊から現在まで
種石悠
　奥尻島のオホーツク文化

＜訳稿＞
アレクサンドル・ミハイロヴィッチ・ペヴノフ（オクサーナ・ボンダレンコ・高瀬訳／呉人恵監修）
　満洲・ツングース語族における古アジア諸語からの借用語

＜資料紹介＞
中村絵美
　北海道立北方民族博物館及び長万部町収蔵の長万部アイヌの資料について
山田祥子
　北海道立北方民族博物館が所蔵する池上二良氏の調査・研究ノート（引照付きリスト）

＜資料＞
笹倉いる美
　のるりすと2021―北方研究データベース―

INFORMATION

行事報告

◆12月4日（土）はくぶつかんクラブ「オホーツクの森ガーランド」（講師：石原生久代解説員）を開催しました。

うまく作れたかな？

◆1月9日（日）解説会「オホーツクシリーズ⑮北の状景から」を出展者の伊藤博己氏、橋本郁弥氏、橋本敏一氏、三浦奈津美氏に来館いただき開催しました。

解説を行う橋本敏一氏

◆1月16日（日）解説会「道東の擦文文化」（講師：種石悠学芸員）を開催しました。

解説会の様子

◆1月22日（土）はくぶつかんクラブ「かんじき体験」（講師：野口泰弥学芸員）を開催しました

歩き疲れて休憩する参加者と講師

行事の中止

新型コロナ感染症蔓延防止や天候不良のため、下記の行事を中止しました。
◆1月15日（土）講習会「初めての歩くスキーツアー」（講師：中田篤学芸員）
◆2月19日（土）はくぶつかんクラブ「北方の言語であそぼう」（講師：山田祥子学芸員）

学芸員実務実習

◆2月1日（火）～6日（日）3名の学生を受け入れて学芸員実務実習を行いました。

北方民族博物館だより
No.124
令和4年（2022年）3月17日発行
編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888　Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org
指定管理者
一般財団法人北方文化振興協会